

病虫害発生予察情報予報第 3 号（7 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
水稲 (早期)	穂いもち	やや少	 斑点米カメムシ類
	紋枯病	並	
	斑点米カメムシ類	やや多	
	1. いもち病 葉いもちの発生が認められている圃場では、穂ばらみ期に穂いもちの防除を行う。葉いもちの発生が上位葉に見られるなど穂いもちの多発生が予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う。		
水稲 (早植え)	葉いもち	やや少	 葉いもちの進展型病斑
水稲 (普通期)	葉いもち	やや少	
	1. いもち病 放置された残り苗は伝染源となるため、速やかに除去し処分する。本田で新たな病斑の発生が認められたら、早急に防除を行う。 2. スクミリンゴガイ 一部圃場で発生が多い。被害を防ぐため、用排水路での貝及び卵塊の捕殺、移植後の浅水管理や薬剤防除等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、「佐賀県病虫害防除のてびき」および農林水産省が公表している「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル(移植水稲)」(農水省 HP) を参照する。		
水稲 (早植え・普通期)	トビイロウンカ	並	 トビイロウンカ
	セジロウンカ	並	
	コブノメイガ	並	
	1. 海外飛来性害虫（ウンカ類、コブノメイガ） 今後の飛来状況等については、当センターが発表する最新の情報を確認するとともに、各地域で発生状況を確認する。多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、その次世代幼虫のふ化揃い期に防除を行う。なお、トビイロウンカの発生予測図については、令和4年6月29日付病虫害対策資料第3号を参照する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	多	 ハダニ類
	うどんこ病	少	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	並	
	アブラムシ類	やや多	
	1. ハダニ類 今後の発生が多いと予想される。本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5～7日間隔で2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。 2. 炭疽病、疫病、萎黄病 発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。特に炭疽病については、伝染抑制効果が著しく高いビニル雨よけ下で育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。また、灌水を過度に行うと、高湿度条件が長時間維持され、発病が助長されるため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する。		
アスパラガス	茎枯病	並	 ネギアザミウマ
	褐斑病	並	
	斑点病	少	
	アザミウマ類	やや多	
	ハダニ類	並	
1. 茎枯病、褐斑病 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。特に近年発生が多い褐斑病は、感染から発病まで潜伏期間が20～30日と長いことから、発生前からの予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する（前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第除去し、適切に処分する。 2. アザミウマ類 今後の発生がやや多いと予想される。虫見板への払い落とし等を行い、発生状況に注意し、早期防除に努める。発生が多い場合は、1週間間隔で2回防除する。			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	並	 ヒノキ樹上の チャバネアオ カメムシ
	1. 果樹カメムシ 飛来状況は地域や園地によって異なるため、園内外をよく確認し、発生が確認されたら防除を行う。		
カンキツ	そうか病	並	 ミカンハダニ
	かいよう病	並	
	黒点病	やや少	
	ミカンハダニ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	1. ミカンハダニ 一部圃場で多発生している。ハダニの密度が減少しない場合は、殺ダニ剤による防除を行う。ただし、薬剤抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。 2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合、本病が発生しやすい園および幼木園では、襲来7日前～前日までに必ず薬剤防除を行う。		
ナシ	黒星病	少	 ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	やや多	
	ハダニ類	多	
	1. ハダニ類 園内をよく観察し、低密度時からの防除を徹底する。特に、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。 2. 黒星病 6月下旬～7月上旬は主要な感染期となるため、DMI 剤を用いた防除を必ず実施する。発生園、常発園または雨が続く場合には、DMI 剤を追加散布する。		
ブドウ	黒とう病	並	 べと病
	べと病	やや少	
	褐斑病	並	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	1. チャノキイロアザミウマ シャインマスカットは巨峰と比較して、本虫の被害を受けやすいため、他品種と混色している場合は、シャインマスカットを含め、袋掛け後も2～3回程度防除を実施する。 2. べと病 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。また、べと病の罹病葉は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
茶	カンザワハダニ	やや多	 輪斑病 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	
	チャノコカクモンハマキ	並	
	チャノホソガ	並	
	炭疽病	やや多	
	輪斑病	並	
1. 炭疽病 本年は発生が多い。新芽開葉初期が防除適期となるので、この時期に薬剤散布を実施する。開葉初期に予防剤、その後2～3葉期に治療剤を散布すると効果的である。二番茶摘採後に枝条更新を行わない園では、確実に防除を行う。 2. チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ 一部園場で発生が多い。萌芽期～開葉初期に防除を行い、多発生園では、さらに一週間後を目安に追加防除を行う。 3. クワシロカイガラムシ 一部園場で発生が多い。防除適期は第2世代ふ化期の7月中下旬頃と予想される。園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期に防除を実施する。 4. 輪斑病、新梢枯死症 摘採等による葉や茎の傷口に病原菌が付着して感染するため、発生の多い園場では二番茶の摘採あるいは浅刈り整枝直後に薬剤散布を行う			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害防除のてびき」も参照してください。

佐賀県病虫害防除のてびき掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321928/index.html

QRコード→



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病虫害等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病虫害の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病虫害の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病虫害を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病虫害を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

7 月の気象条件

- 病虫害の発生に関与する 7 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 4 年 6 月 23 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病虫害の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 7 月の気象予報（確率予報%）			病虫害の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	20 (27.2℃)	70	高い
降水量	40	40 (366.8 mm)	20	やや少ない

Ⅲ. 7月の予報

水稲（早期、上場地域）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：12 圃場

調査日：6 月 17 日



定期調査圃場の様子（早期水稲）

1. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

葉いもち発生株率1.0%（平年2.2%、前年3.7%）

平年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、少発生の条件（－）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

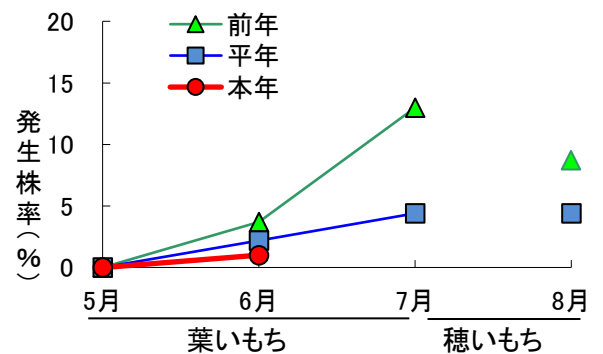


図1 早期水稲でのいもち病の発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

発生株率0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、やや多発生の条件（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 早期水稲の出穂期～登熟期は気温が高い時期であり、本病が進展しやすいので、出穂の20～10日前（粒剤の場合は30～20日前）を中心に防除する。

(2) 薬剤は株元に十分かかるように散布する。

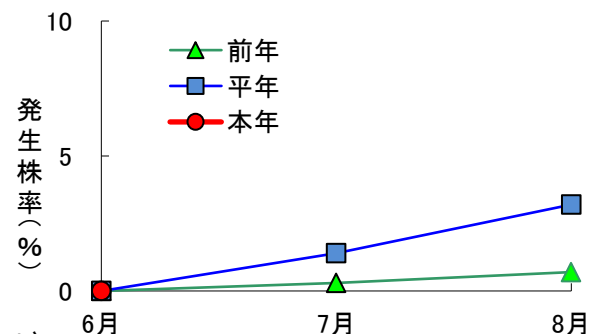


図1 早期水稲での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカス

ミカメ、ミナミアオカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) イネ科雑草での捕虫網によるすくい取り調査（6月17日～22日）

発生量は平年並（表1）。（±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 水稻の出穂 10 日前までに、畦畔を含めて除草を行う。
- (2) 乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期と乳熟期の 2 回、薬剤防除を行う。

表 1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2022年6月17日～22日)											
調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハラカメムシ		シラホシカメムシ類		アカシカメムシ		ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	
佐賀市東与賀町	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	2	0	0
佐賀市諸富町	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	8	4	0
佐賀市川副町	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	5	0	0
唐津市鎮西町	道端	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	4	0	0
唐津市肥前町	道端	イタリアンライグラス	0	0	0	0	2	0	0	0	0
多久市南多久	道端	エノコグサ類	0	0	1	0	0	0	63	0	0
武雄市橋町	道端	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	2	0	0
鹿島市常広	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	28	0	0
小城市三日月町	道端	イタリアンライグラス	0	0	1	0	0	0	290	42	0
神崎市神埼町	空地	エノコグサ類	72	0	1	0	0	0	14	1	0
神崎市千代田町	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	33	60	0
上峰町江迎	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	3	0	0
平均(本年)			6.0	0.0	0.3	0.0	0.2	0.0	37.7	8.9	0.0
平年(過去10年の平均)			1.8	0.1	1.3	0.2	0.7	0.0	26.8	14.0	0.05
前年			0.2	0.0	1.7	0.2	0.2	0.0	36.7	8.6	0.0

水稻(山間早植え)

[【概要に戻る】](#)

定期調査: 12 圃場

調査日: 6月20日



定期調査圃場の様子(早植え水稻)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率0% (平年0.03%、前年0%)

平年比: 並(±)

(2) 葉いもち感染好適条件出現状況【県内、隣接県 計10地点】

BLASTAMにおいて、感染好適条件および準感染好適条件が6月11日、14日、22日を中心に断続的に出現した(表1)。 (±)

(3) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、少発生の条件(ー)

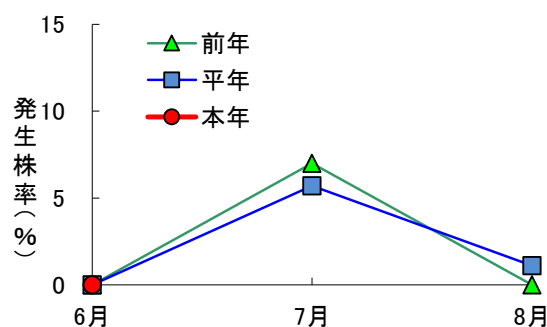


図1 山間早植え水稻でのいもち病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉いもちの進展型病斑(予報の概要の写真参照)が確認された場合には、早急に本田防除を実施する。
- (2) 今後のBLASTAMによる感染好適条件の出現に注意し、圃場における発生状況を確認する(佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照)。

表1 BLASTAMによる葉いもち感染好適条件の出現状況(2022年)

月	日	佐賀					福岡			長崎	
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	前原	大宰府	久留米	松浦	佐世保
6月	1日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	4日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	6日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	7日	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
	8日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	9日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	10日	-	?	-	-	-	-	-	-	-	-
	11日	-	-	-	-	●	-	●	●	-	●
	12日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	13日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	14日	●	-	-	-	-	-	●	-	●	-
	15日	-	-	-	●	-	-	●	-	-	-
	16日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	17日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	18日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	19日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	20日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	21日	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-
	22日	●	●	-	●	-	2	-	-	●	-
	23日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	24日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	25日	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-
	26日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	27日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	28日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

- 1: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満)
 2: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上)
 3: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外)
 4: 準好適条件(湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い)
 ●: 好適条件(湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した)
 -: 好適条件の出現なし
 ?: 判定不能

BLASTAMの活用方法

- (1) BLASTAMは、気象条件(アメダスデータ)のみによって葉いもちの発生を予測するシステムである。しかしながら、実際の圃場における葉いもちの発生には、気象条件の外にも、菌の多少(密度)、イネ品種による抵抗性や体質、薬剤防除条件などが大きく関与している。したがって、BLASTAMは、あくまでも葉いもち発生予測の参考資料の一つとして扱う。
 (2) BLASTAMは、葉いもちを対象としており、稲の移植約20日後を起点とした35日間(6月15日移植の場合、7月5日～8月10日)が適用期間とされている。ただし箱施薬が行われた圃場では、その持続期間中はBLASTAMは使用できない。
 (3) 葉いもちは、菌の侵入から発病までの潜伏期間が約1週間である。そのため、BLASTAMによる感染(準感染)好適条件が現れた場合、感染株では約1週間後から初発生あるいは病斑数の急激な増加が予想できる。
 (4) BLASTAMによる感染(準感染)好適条件の出現回数が多いと、その地域の葉いもちの発生面積が増加し、発病程度も著しくなることが予想できる。

水稲(普通期)

[【概要に戻る】](#)

定期調査: 48圃場(内4圃場は未移植)

調査日: 6月17日～22日



定期調査圃場の様子(普通期水稲)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率0%(平年0.5%、前年0.1%)

平年比: やや少(一～土)

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、少発生の条件(一)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

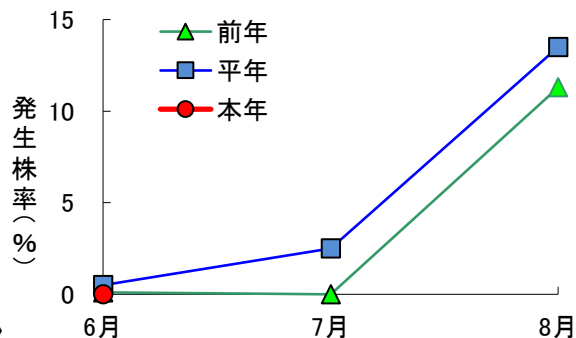


図1 普通期水稲でのいもち病の発生推移

水稻（早植え、普通期）

[【概要に戻る】](#)

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 6月23～25日を中心に、各トラップへの誘殺を確認している（共通一表1）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. セジロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 6月4日以降、各トラップへの誘殺を確認している（共通一表1）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 早生・中生品種で1株当たり成虫が5頭以上、晩生品種（ヒヨクモチ等）で1株当たり成虫が10頭以上寄生していた場合は、飛来成虫あるいはその次世代ふ化幼虫を対象とした防除を行う。

(2) その他については特記事項を参照する。

3. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 6月26日まで、各トラップへの誘殺を確認していない（共通一表1）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、飛来あるいは発蛾最盛期の1週間後に防除を行う。

(2) その他については特記事項を参照する。

共通一表1 イネウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2022年6月28日現在)

月日		トビイロウンカ					セジロウンカ					コブノメイガ							
		佐賀県		長崎県			佐賀県		長崎県			佐賀県				長崎県			
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	神埼市	伊万里市	白石町	武雄市	諫早市	諫早市	
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	フェロモン トラップA	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	粘着トラッ プ(20W 蛍光灯)	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB	
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	
	4日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0						0	0	
	5日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0						1	0	
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						0	0	
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					1	0	
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					4	0	
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	-	0	4	0
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					4	0	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0	0
	14日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	15日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0					0	0	0
	16日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0	0
	17日	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0	0
	18日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	19日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0					0	0	0
	20日	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0					1	0	0
	21日	0	0	0	0	0	2	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	22日	0	2	0	0	0	5	1	1	1	0	0					0	0	0
	23日	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0					0	0	0
	24日	1	7	0	0	0	3	2	1	2	1	-					0	0	0
	25日		41	0	0	0		18	3	1	0	0					2	1	0
	26日	0	1	0	0	0	2	2	0	0	0	0					0	0	0
	27日		65		0	0		8		0	0	0					0	0	0

注1)佐賀市ネットトラップは、農業試験研究センターで調査。嬉野市ライトトラップ(予察灯)は農業技術防除センターで調査。

注2)コブノメイガ:神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。

※長崎県のデータは、長崎県病害虫防除所提供。

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：10 圃場

調査日：6 月 17～22 日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：14.8%（平年 8.8%、前年 8.0%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

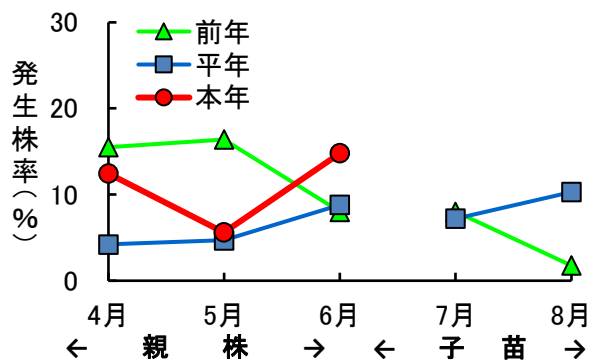


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：1.6%（平年 27.5%、前年 2.4%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、少発生の条件（－）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

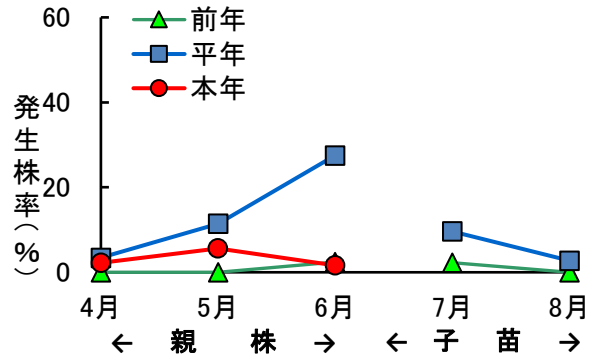


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：0%（平年 0.02%、前年 0.02%）

平年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

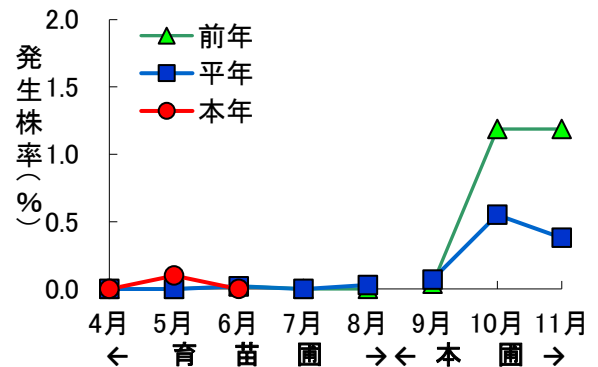


図1 イチゴ立枯症の発生推移

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：2.8%（平年 1.2%、前年 0.4%）

平年比：多（＋）

ただし、発生は一部圃場に限られる。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

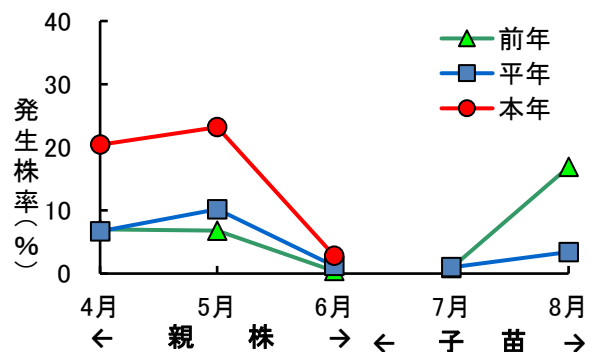


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7 圃場

調査日：6月17～22日



定期調査圃場の様子

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1 参照）

発生茎率：0.6%（平年0.1%、前年0%）

平年比：多（+）

ただし、発生は一部圃場に限られる。

(2) 7月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

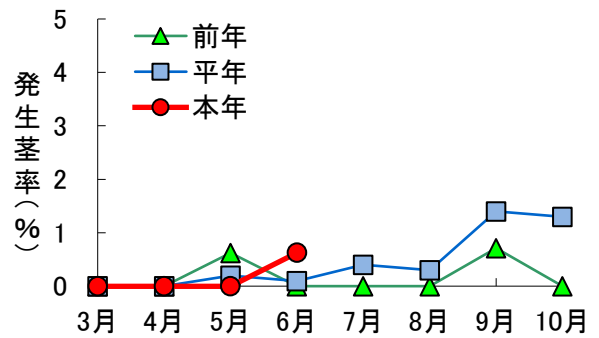


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：2.5%（平年0.6%、前年1.9%）

平年比：多（+）

ただし、発生は一部圃場に限られる。

(2) 7月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

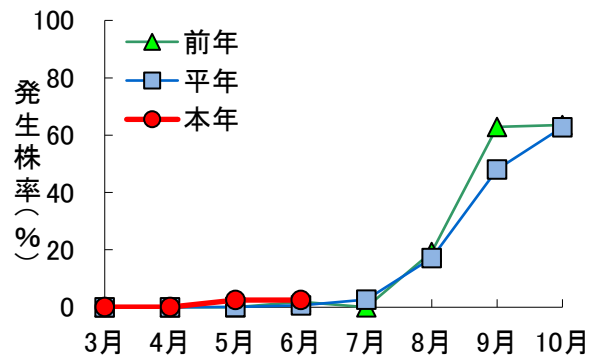


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：0%（平年2.2%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 7月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

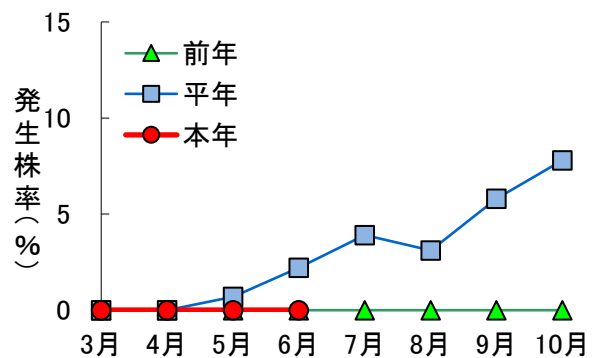


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：38.8% (平年 34.7%、前年 43.1%)

平年比：並 (±)

(2) 7月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

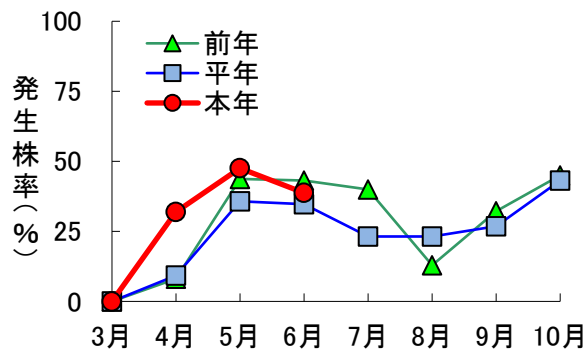


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 5月1半旬～6月4半旬までの誘殺量

① 予察灯 (図1 参照)

平年比：やや少 (ー～±)

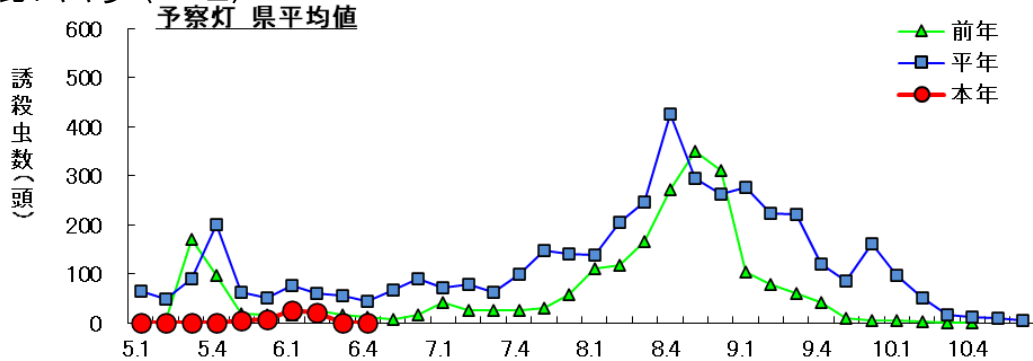


図1 予察灯 (佐賀市、小城市) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並 (±)

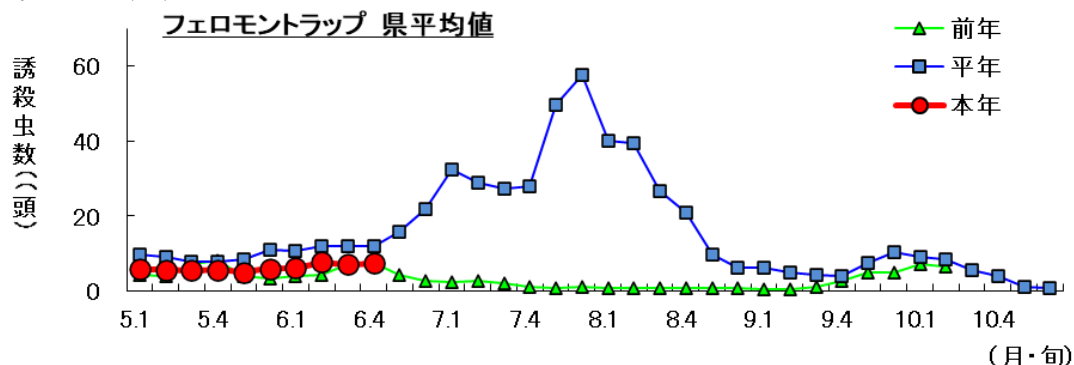


図2 フェロモントラップ (小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないよう剪定をする。
- (2) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖(リサージェンス)を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。
- (3) その他については、特記事項を参照

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場

調査日：6 月 20～22 日



1. かいよう病

定期調査圃場の様子

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図 1、2 参照)

発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並 (±)

発生果率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 7 月の気象予報

降水量はやや少で、やや少発生の条件 (ー～±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種 (ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) では、無機銅水和剤 (クレフノン 200 倍加用) で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。

- (2) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。

- (3) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

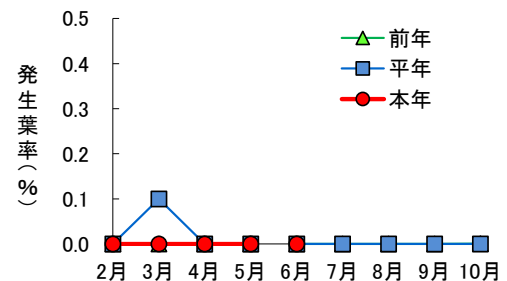


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

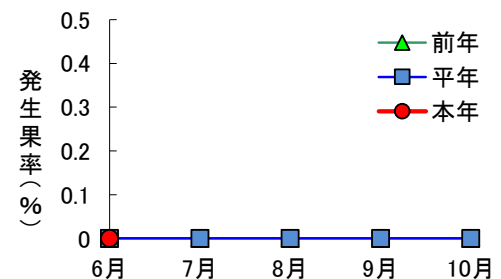


図2 カンキツかいよう病 (果実)

の発生推移

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生果率：0% (平年 0.6%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 7 月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件 (ー～±)

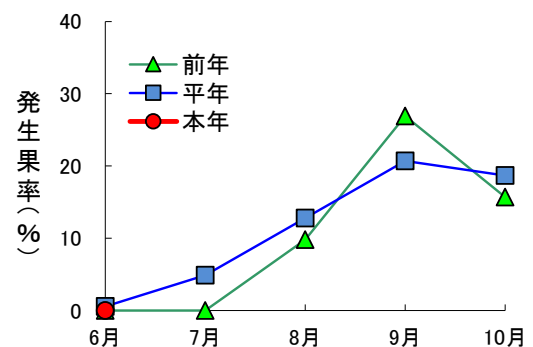


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200～250mm（マシン油乳剤を6月に加用した場合は300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。
- (2) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は伐根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：18.5%（平年15.5%、前年0.1%）

平年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、多発生の条件（+）

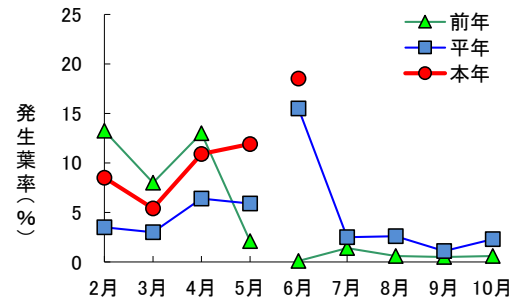


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) マシン油乳剤を7月以降に使用すると果実腐敗の発生を助長したり、糖度の低下を招いたりする場合があるので使用しない。

4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生果率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±）

② 黄色粘着トラップ（図2参照）

平年比：やや少（～±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、多発生の条件（+）

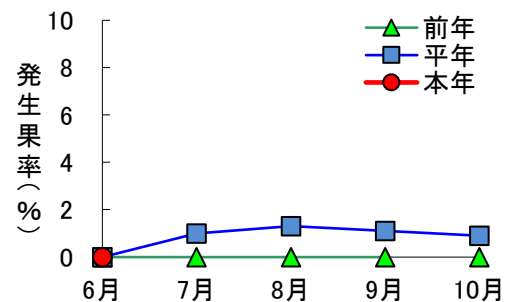


図1 チャノキイロアザミウマによる被害果の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫の発生が多い地域では、7月中下旬頃に薬剤防除を徹底する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

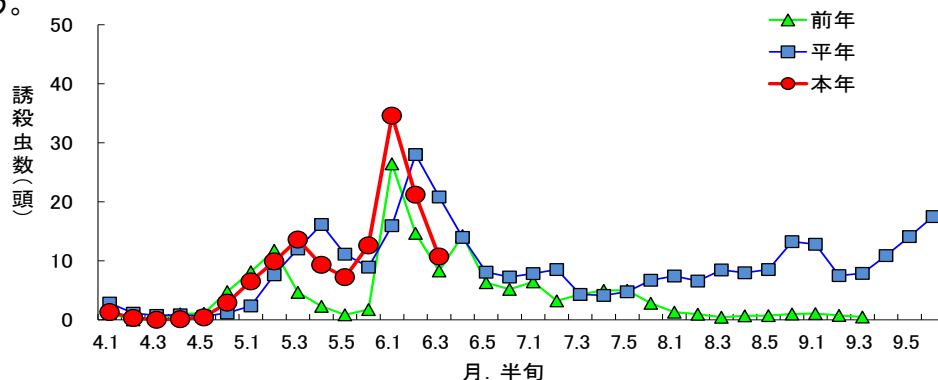


図2 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（小城市 果樹試験場調査）

ナシ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場
調査日：6 月 21 日



定期調査圃場の様子

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2 参照）

発生葉率：0%（平年 1.7%、前年 0%）

平年比：やや少（一～±）

発生果率：0%（平年 1.1%、前年 0%）

平年比：やや少（一～±）

(2) 7 月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、少発生の条件（一）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

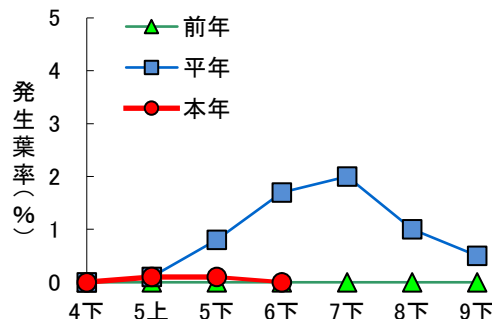


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

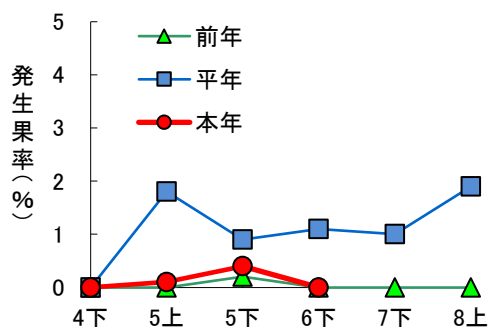


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

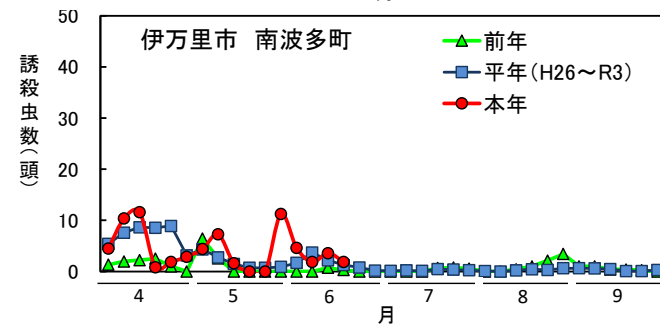
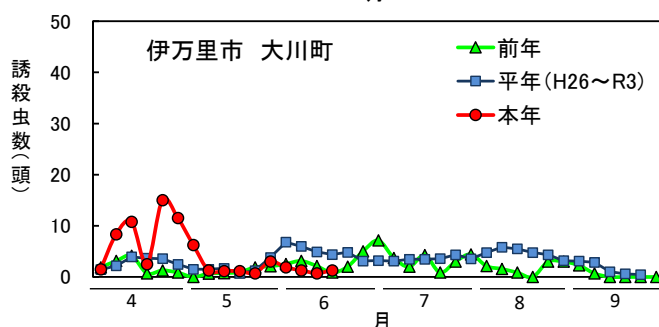
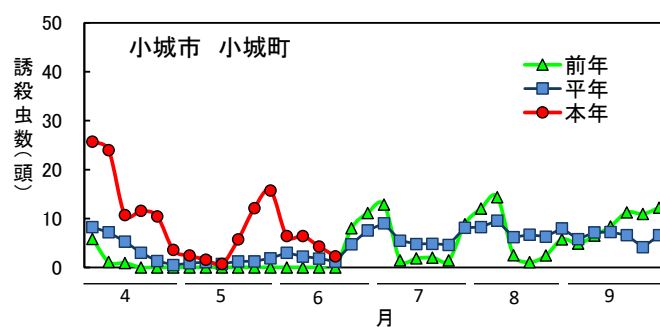
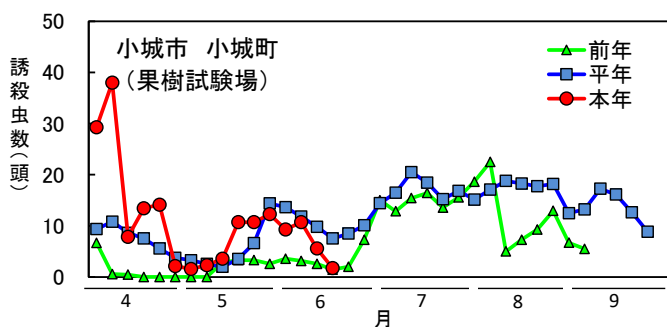


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦地域振興センター調査)

(2) 7月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 7月以降は世代が混在するため、7～10日間隔で薬剤散布を行う。
- (2) 交信攪乱フェロモン剤設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：2.1% (平年 0.1%、前年 0%)

平年比：多〈+〉

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時 (寄生葉率 10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満) からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

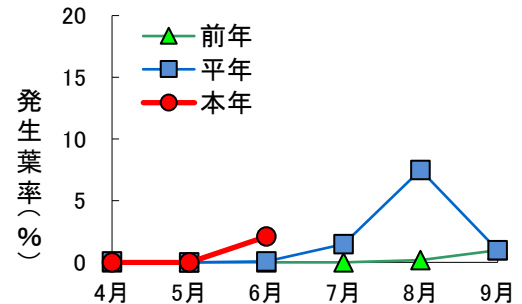


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6園場

調査日：6月20～21日



定期調査園場の様子

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年 0.3%、前年 0%)

平年比：並〈±〉

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、少発生の条件〈-〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨前の予防散布を徹底するとともに、散布時には防除効果を高めるため、棚面の上からも散布する。
- (2) ストロビルリン系殺菌剤 (アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等) に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。

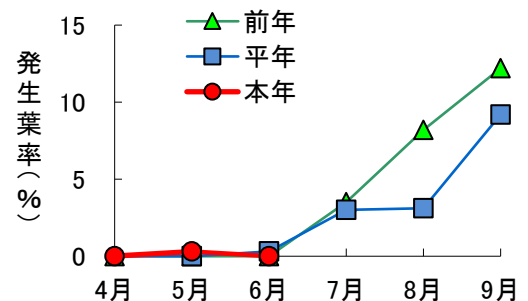


図1 ブドウベと病の発生推移

2. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図2）参照）

平年比：やや少（－～±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月中旬～7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7 圃場

調査日：6月20～22日



1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：1.6%（平年3.2%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。

定期調査圃場の様子

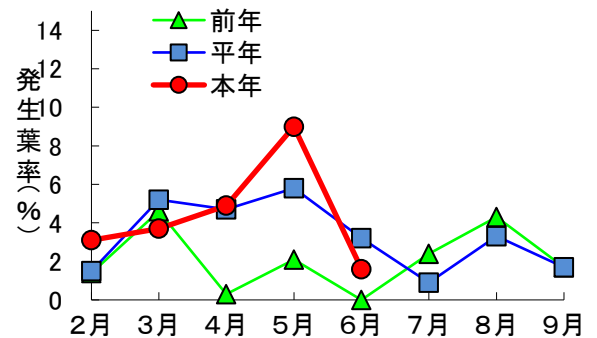


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

発生株率（雄繭）：27.1%（平年26.9%、前年17.1%）

平年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量はやや少で、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

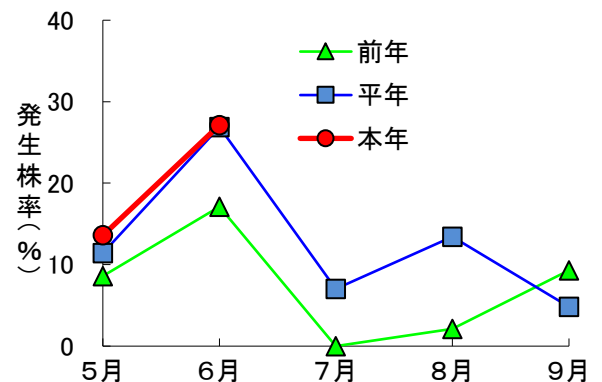


図1 クワシロカイガラムシ（雄繭）の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：14.4頭/4ヶ所 (平年 22.4頭、前年 19.1頭)

平年比：やや少 (一～±)

② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比：並 (±)

(2) 7月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少で、多発生の条件 (＋)

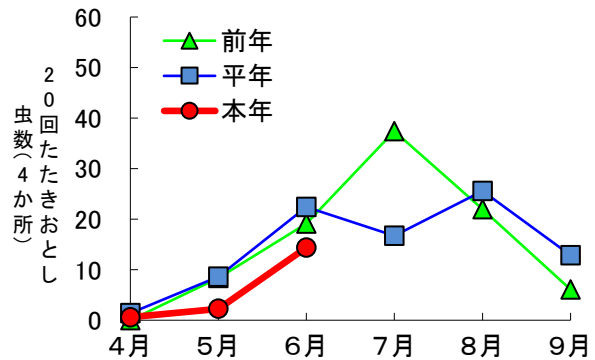


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

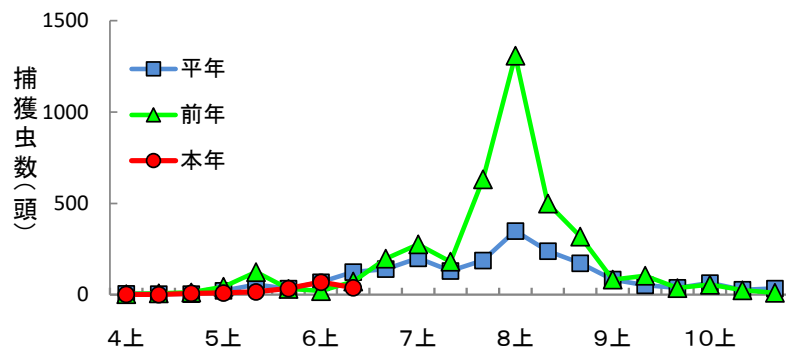


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：3.0頭/4ヶ所 (平年 3.3頭、前年 4.7頭)

平年比：並 (±)

(2) 7月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (＋)

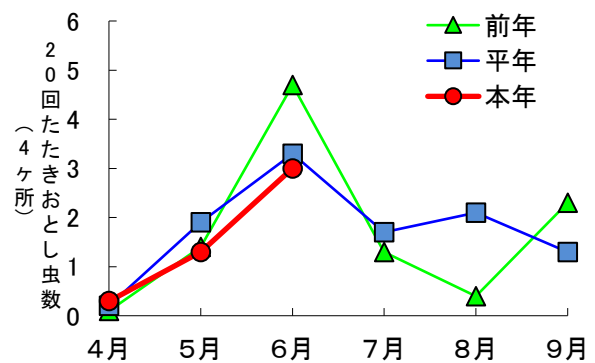


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

5. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照、)

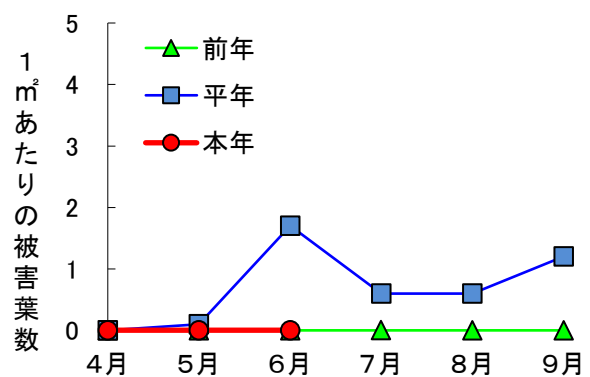


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

被害葉数：0 枚/m²（平年 1.7 枚、前年 0 枚）

平年比：やや少（－～±）

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±）

3）防除上注意すべき事項

(1) 新葉展開期で幼虫が葉裏に潜行する時期に、薬剤が十分かかるように散布する。発蛾最盛期から1週間後、が防除適期である。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

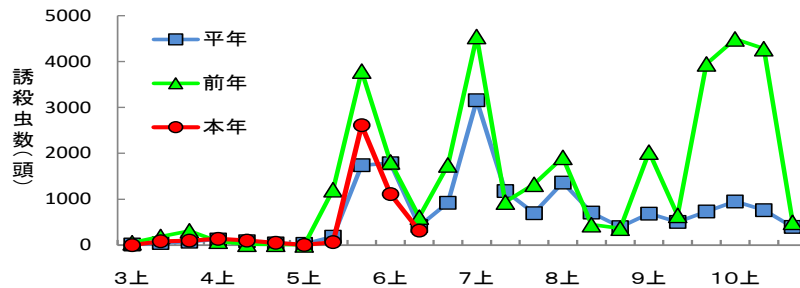


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

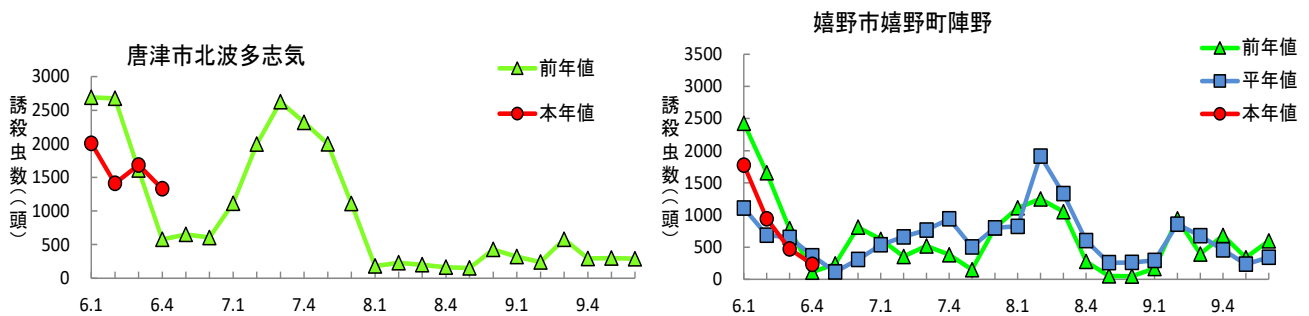


図3 フェロモントラップによるチャノホソガの半旬別誘殺数推移（唐津市・嬉野市、防除員調査）

※ 唐津市は、設置場所等を変更しているため、本年値、前年値のみ表示。

6. 炭疽病

1）予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2）予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉数：6.6 枚/m²（平年 1.6 枚、前年 2.4 枚）

平年比：多（＋）

(2) 7月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件（－～±）

3）防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

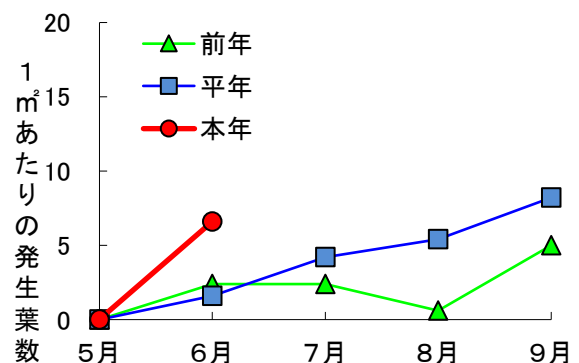


図1 炭疽病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

